



Dan Graham by Dan Graham

ダン・グレアムによるダン・グレアム

Topics

ダン・グレアムによるダン・グレアム:

館長のご挨拶

はじめてのダン・グレアム

次回展覧会ご案内:

逝きし芸術家を偲んで

新収蔵作品展

連載:

ボランティア日和

展示室で考える

ダン・グレームの不思議な視覚世界

新年あけましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

混沌として行き先の見えにくい21世紀も今年で4年目に入りました。何が起っても不思議でなくなった不安な時代の霧が、すっきりと晴れて見通しの良くなる日ははたして来るのでしょうか。あらたまの年の初めにせめてのこと、未来への希望をつなぎとめておきたいものと、世界の平和と人類の多幸とを切に願うばかりです。

さて、昨年暮れからこの正月にかけて、当館では現代美術界の巨匠ダン・グレーム氏の代表作を一堂に会して紹介する特別展を開催中です。1965年にアメリカで活動を開始してから約40年間、つねに時代の最先端を走り続けてきたグレーム氏が、みずから千葉を来訪し、会場の構成、作品の設営を陣頭指揮して仕上げた、文字通り「ダン・グレームによるダン・グレーム」展となっています。ガラスや鏡、フィルムやビデオが生み出す映像の効果を様々に駆使、演出して、日常では決して味わえない不思議な視覚の世界へといざなわれる、その新鮮で刺激的な快感を多くの方々に直接味わっていただければまことに幸いです。

開催前の準備段階で来館中のグレーム氏にご挨拶したところ、「私の作品は子どもたちに人気があるのです。誰もがスーパーマンになれるか

ら」といたずらっぽくおっしゃったのが印象的でした。それがどのようなことを意味するものかは、会場にお子さんやお孫さんをお連れになって一緒に体感していただければ、きっと腑に落ち、お分かりになることでしょう。現代美術は、固定観念にとらわれないで済む若い人、幼い子たちに、分かりやすく、自然に楽しめるところがあります。私をはじめとする中高年の人たちも、食わず嫌いのまま遠ざかっていないで、未知の美術表現にも敢えて接近していく好奇心が必要でしょう。固くなりつつある頭や心を柔らかく揉みほぐすためにも、恰好な機会となるはず

です。ダン・グレーム氏にお会いして受けた第一印象は、ものごとに熱中するとすべてを忘れ、一事に没入する天才肌の典型というものでした。氏とはじめて接した館員たちによると、忘れ物は得意技の一つで周りの人がいつも身の回りの世話をやいてあげなくてはいけないこと、興味の対象を見つけると子どものように喜んでそのことやものに熱中しがちなこと、身なりを構わないだぶだぶのシャツやズボン姿がチャーミングなこと、などなど、巨匠のイメージからはほど遠い純なお人柄に、知らず知らず好感を抱かされ、魅了されてしまったとのことでした。まことに天

才は常人を超えた存在であるものと、その実例に接したようで嬉しくなりました。

「ダン・グレームによるダン・グレーム」展が始まったちょうどその頃、直前に行われた「天津市芸術博物館展」の成功を感謝するお礼の使者として、天津市を訪れる旅に出かけました。2泊3日のあわただしい小旅行でしたが、無事作品の返却も済み、千葉市と千葉市美術館からの深甚の謝意を直接お届けすることができました。友好都市としての千葉市と天津市が美術を通して今後もますます文化交流の実をあげられるようにと、おたがいに希望し、誓いあったものでした。

滞在中に、建設途上の天津博物館の工事現場も見学させていただきました。天がける鶴の姿にも似た壮大でしかも優美な外観を見せる新館の設計と建設は、日本の建築家とその設計事務所が担当しているものとのこと、天津と日本、そして千葉との関係がますます親密なものとなっていることが実感させられました。来年4月にオープンするという天津博物館の未来が輝かしいものとなるであろうことを、姉妹館である当館を代表して祈念しているところです。

千葉市美術館館長 小林 忠

はじめてのダン・グレーム

ダン・グレームは、60年代から現在に至るまで、既成の美術の枠組みに収まりきれない作品を発表し続けてきました。現代アートをあまりご覧にならない方は、絵画、彫刻、写真といったお馴染みのジャンルに属さない彼の作品を、どのように見ればよいのか戸惑うことでしょう。確かに展示会の最初に展示されているコンセプチュアル・アートは、少々難解かもしれません。けれどもパヴィリオンをはじめとする中期以降の作品は、必ずしも難しくはありません。

この文章は、主にはじめてグレ

ームの作品をご覧になる方々を対象に、それらを見るうえで役立つヒントを示したものです。限られた紙幅のなかで、グレームの全てを語ることはむろん不可能ですが、彼の作品を理解するきっかけをつかんでいただければ幸いです。

1. 伝統的美術とは無縁なグレーム

ダン・グレームは、アメリカの現代アートを代表するアーティストです。1960年代中頃にギャラリー経営者としてアートの世界に足を踏み入れ、それがきっかけで作品制作を始め

ました。けれども彼は、美術学校や美術大学などで、アーティストとなるための専門教育を受けたことが全くありませんでした。それどころか最初はライターを目指していたほどで、60年代には、スナップ写真や文字と図形を用いたコンセプチュアル・アートなどを少数制作しただけでした。同世代の多くのアーティストたちとは違って、グレームは、絵画や彫刻といった伝統的な美術のジャンルとは完全に離れたところから出発したのです。

グレームは、制作活動を開始した

直後に発表した雑誌作品によって、コンセプチュアル・アート（概念芸術）の先駆者として有名になりました。雑誌作品とは、最初から雑誌に掲載することを意図してつくられた全く新しい作品形式で、文字や図形で構成された一見すると平凡な印刷物です。雑誌のページとして印刷された作品一点一点が、作品の複製ではなくオリジナルとして大量生産、大量頒布されるのです。また《アメリカのための家》や《腫脹減衰》などの一部の作品は、単に雑誌に掲載されるだけでなく、雑誌広告や記事の体裁をとっています。広告や記事の私たちをとることで、グレアムは、雑誌が本来持つ伝達、コミュニケーション機能を作品に取り込もうとしたのでした。

2. 新しい芸術形式 - パヴィリオン

しかし多くの現代アートファンが、ダン・グレアムといえばパヴィリオンを思い浮かべることでしょう。パヴィリオンはハーフミラー、ガラスなどで出来た小型の建造物で、1980年頃から現在まで、世界中でかなりの数が制作されてきました。ロココ時代の庭園にある東屋や、ミース・ファン・デル・ローエやフィリップ・ジョンソンによるガラスハウスなどの過去の建築物とも関連すると、作家自身が述べています。けれどもパヴィリオンは、(当初)「パヴィリオン/彫刻」と呼ばれていただけでなく、建物として内部に入れるだけでなく、抽象彫刻として外部から鑑賞することも意図されているのです。つまり建築と彫刻の中間的な作品なのです。

パヴィリオンは、彼が大きな影響を受けたミニマル・アートの作品のように、立方体・円柱・三角柱といった単純な幾何学的形態を特徴とします。しかしパヴィリオンは、単にかたちの面白さ、美しさを見せるだけではありません。ガラスやハーフミラーが周囲の光を複雑に反射させ、興味深い視覚体験を私たちにもたらします。例えば《円形の入口のある三角柱》は、ハーフミラー、ガラス、鏡で出来た三角柱です。外から見てもそれなりにきれいですが、内部に入ることによって初めてこの作品の真価が理解できます。三面のハーフミラーと鏡が互いに反射しあうことで、自分がいる三角形のまわりに5つの鏡像の三角形が現れ、そのなかに5人の自分自身が見えるからです。

さらにパヴィリオンとミニマル・アートの作品とのあいだには、もう一つの違いが見られます。すなわち建築の要素も兼ね備えるパヴィリオン

には、スケートボード場、カフェ、保育所など、特定の社会的役割や機能を持つタイプもあるのです。例えば《女の子のメイク室》は、子供たちの集まる場所に置かれる子供のための遊具として考案され、《連結する三つのキューヴ/ビデオ上映スペースのためのインテリアデザイン》は、美術館の展示室内でビデオ作品を上映する目的で作られました。

3. コミュニケーションの道具としてのアート

パヴィリオンが典型的にそうであるように、グレアムは初期から現在にいたるまで、彫刻、写真、建築といった既成のジャンルの中に位置する作品を意識的に制作してきました。初期のコンセプチュアル・アートは文学とアート、雑誌記事や広告とアートの中間形態であり、前述したように、パヴィリオンは建築と彫刻の中間形態でした。

グレアムはなぜ、二つのジャンルの中間に位置するような作品をつつたのでしょうか。確かに60年代、グレアム以外にも多くのアーティストたちが、複数のジャンルの中間に位置する作品を生み出しました。視覚詩、具体詩、音響詩、ハプニング、図形楽譜などの実験的作品がこれにあたります。しかしグレアムの場合、単に複数のジャンルにまたがる作品を試みただけでなく、雑誌や建築という明確な社会的機能を持つジャンルとアートとの混交を目指したことが特徴的と言えるでしょう。その結果、雑誌作品にしてもパヴィリオンにしても、雑誌や建築のもつ本来の機能を取り込み、(雑誌作品の場合)アーティストと受容者のあいだのコミュニケーション、そして(パヴィリオンの場合)作品を見る人同士のコミュニケーションの新しい形を提案することになったのです。パヴィリオンを例にこのことを説明しましょう。

パヴィリオンに用いられるハーフミラーは、光が強く当たる側が鏡となり、その反対側が普通の透明なガラスになります。したがって強い光が当たる側の人は、鏡に映る自らの姿を見ることになりますが、そのとき反対側からその様子を一方的に見られているかもしれません。それに対して、《千葉/北九州のためのニュー・ラビリンス》の展示のように両側に均等に光が当たるとき、ハーフミラーは鏡とガラスの中間の状態になります。もし知り合い同士がハーフミラーをはさんで向き合えば、相手の姿と自分の姿が重なり合うのを見

るでしょうし、また知らない人がハーフミラーの反対側にいることに気づいた瞬間、その人との距離や関係を意識するかもしれません。このように、作品を見る人々は単に作品を鑑賞するだけでなく、ハーフミラーに映る自分自身や周囲にいる人、ハーフミラーの反対側を歩く人も見ることになるのです。グレアムのパヴィリオンは、作品と向き合い作品の美をあげようという伝統的な鑑賞方法に加えて、作品に参加し体験するアート、コミュニケーションの道具としてのアートという新しいアートの受容方法を提案しているのです。

パヴィリオンを見たとき、皆さんはそこに何か特別の意味を読み取ろうとしたかもしれません。確かにパヴィリオンをつくるとき彼が選択した形態や素材には、それが置かれる場所の機能や歴史が反映されることもあります。(例えば、日本で最初につくられた山口県立美術館のパヴィリオンには、障子の棧が使われました。)しかしそういった部分はどちらかというと副次的要素です。大切なことは、ありのままのガラス製建造物としてパヴィリオンを受け入れることです。ハーフミラーがつくる視覚効果を体験し、周囲の環境や人々との関係を再認識してください。難しく考える必要はありません。

学芸員 水沼啓和



今回の展覧会のために発表された、《連結する三つのキューブ
ビデオ上映スペースのためのインテリアデザイン》。モニター
4台ではそれぞれダン・グレアムの作品が上映され、周りにはパ
ヴィリオン建築モデルが7点配置されています。ダン・グレア
ムの作品としては珍しく木材フレームが使われています。



こちらも新作の《千葉/北九州のためのニュー・ラビリンス》。
太陽光に近い特殊な照明でとられています。ハーフミラーと
有孔スチールで構成された三角柱の中に、もう一つ小さな三
角柱があり、それらの相乗効果で不思議な空間が生まれました。

ダン・グレアムによるダン・グレアム会場風景

1974年に発表された《向きあった鏡と時差をもつビデオ・モ
ニター》です。時差装置を用いて、カメラと反対側のモニター
には5秒前の自分の姿が映し出されます。鏡によって映り込み
を繰り返すモニターには、人々の時差がついた行動が映し出さ
れていきます。

バンクーバー・アート・ギャラリー所蔵

奥は上と同じ《千葉/北九州のためのニュー・ラビリンス》手前
は、《女の子のメイク室》です。中には口紅と不思議な鏡がお
いてあり、メイクをすることも可能です。このパヴィリオンは
曲線のハーフミラーを用いているため、内側では太く、外側で
は細く変形した自分自身の姿を見ることができます。

協力:ギャラリー・ホイザー&ヴィルス



展示風景撮影:内田芳孝(左上を除く)

ダン・グレアムによるダン・グレアム

2003(平成15)年12月2日(火)-2004(平成16)年2月1日(日)

10:00-18:00 金曜日は20:00まで

(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日 12月29日(月)-1月3日(土)

1月12日(月・祝)開館、翌13日(火)休館

【入館料】 一般 1000(800)円
大学・高校生 700(560)円
中・小学生 300(240)円
()内は団体30人以上の料金。

展覧会の施工

前号のニュースの「展示室で考える」にもありましたが、展覧会ごとに会場施工は大きく異なります。今回のダン・グレアム展も例外ではありません。展覧会の始まる約1週間前から今回も施工が始まりました。ダン・グレアムや当館学芸員の指示のもと、壁ができ、パヴィリオンがたちあがりしました。仮設の部屋や、パヴィリオンの大きなミラーや枠などを組み立てていく姿は、建築現場を彷彿とさせるものです。今回の美術館ニュースでは、普段見ることのできない展示中の写真をいくつかご紹介いたします。

左上：指示をするダン・グレアム
 右上：《千葉／北九州のためのニュー・ラピリス》の組み立て
 左下：《円形の入口のある三角柱》の組み立て
 右下：《連結する三つのキューブ/ビデオ上映スペースのためのインテリアデザイン》の組み立て



ボランティア日和

episode 2

今回は天野さんが書いてくださいました。特にご年輩の方には「現代美術は難解でどうも」と思われている方も多くいらっしゃると思います。ましてや抽象表現を説明するのは学芸員にとっても難しいものです。そのギャラリートークに果敢に挑んでくださっている天野さんは美術館のフレッシュマンですが、ご年輩の素敵なお方です。

現代美術展で何をみたか -

「ダン・グレアムによるダン・グレアム」展と「斎藤義重」展

昨年4月から千葉市美術館のボランティアとして多くの作品に直面してきました。その間には「ホノルル美術館所蔵 浮世絵風景画名品展」「夢・深水と大正の女たち」「大原美術館所蔵名品展」などが開催されましたが、これらの展覧会の作品は大部分が具象作品でした。

抽象 - 現代美術展として今、「ダン・グレアムによるダン・グレアム」展が開催中です。また昨年5-6月には「斎藤義重」展も開催されました。彼らは両国の現代美術界で独特の足跡を印した作家たちです。抽象作品は難解とされ、同感ですが、抽象作品のアートとしての魅力は具象作品に比してどうなのでしょう。上記二展の作品傾向をほんの少し、新米ボランティアなりの感想を加えて述べさせていただきます。

斎藤義重の作品

- (1) 合板の表面に油彩で描いた初期作品から、終期まで続けた木の板を組み合わせたモニュメント的・ディスプレイ的の制作まで「木」素材に基づいている。木ゆえに可能な造形、天然自然とのつながり、穏やかな感覚など。
- (2) 表現形態の歴史的移り変わりのあらましでは、平面への多色の複雑または華やかな彩色 木の素材感を保った幾何学的立体 色数を少なく単純化した形態の、やや厚みのある平面作品。シャープな表現 黒色のみの木板を2枚から20枚くらいまで組み合わせた作品。大部分は直線の板を組んだ単純な造形。鑑賞者に思考、解釈力を要求します。

ダン・グレアムの作品

- (1) “アート”を雑誌などのなかに表現する。作者固有のアートの表明だけ？
- (2) ヴィデオカメラで鑑賞者を写しそれを鑑賞者が見るように。鑑賞者の思考がアートとなる。アートの“場”に引き込み創作を彼の手に。
- (3) 一部をハーフミラーで作った三角とか円形の壁面、鑑賞者の入るスペースをもつ室内・野外に調和した「小屋」的構造に進化。子供たちの遊戯空間の設計図、大人たちの都会の喧騒を忘れる小天地的なプロジェクトにも。社会的効用をもつ芸術となった。

=とにかく「百聞は一見に如かず」です。あなたも体験してみませんか！

美術館ボランティア 天野 峯夫

「ダン・グレアムによるダン・グレアム」展のギャラリートークの日程につきましては直接美術館にお問い合わせください。ご参加をお待ちしております。



斎藤義重 《Seisaku ing》1985



芸術家たちが生きた時代

何からこの稿を書き出そうか、未だに迷っているのだが、話題を呼称のことから始めてみよう。

美術の領域において、「現代美術」という呼び方がある。これは、まあ19世紀の印象派あたりから始まる視覚芸術の拡張もしくは革命に伴って展開したさまざまな表現の芸術思潮(ダダとかシュールなどと云えば、ぼんやりとおわかりいただけるだろう)によって産み出された作品群のことを指す。現代に生きている人間が制作すれば、それは現代美術だ、という意見もあるにはあるが、それは暴論である。私が以前本紙の記事で用いた比喻を使うと、いくら流行の衣服に身を包んでも、未だに心に丁髷を結っていれば、その人物を現代人とは呼べない。

こう記して思い出すが、以前は(と云っても30年程前になるだろう)「現代美術」の同義語として「近代美術」とか「戦後美術」という呼称が多く用いられていた。今のところ「近代美術」は印象派から現在まで続く現代美術の潮流の、その前半、1940年代あたりまでを漠然と指す場合に用いられている。

問題は後者の「戦後美術」。この「戦後」は第2次世界大戦以後を指す。

わが国の場合、敗戦を経て「もはや『戦後』ではない」と経済白書が宣言したのは、1956年のことだった。もうすこしで半世紀が経つ。そのことを踏まえると、「戦後美術」という呼称は、もう耐用年数がとっくに終わっている、と考える事だって可能だ。

しかしながら、この文章を記している2003年12月現在、三鷹市美術ギャラリーでは「あるサラリーマン・コレクションの軌跡 戦後日本美術の場所」と題された現代美術の展覧会が開催されている(12月13日まで)。また、当館でも開館間もない1997年に兵庫県立近代美術館(現在では館名から「近代」が取れて兵庫県立美術館となっている)の山村コレクションの一部を拝借して開催した展覧会名は「戦後美術の断面」だった。

耐用年数が過ぎたと思われるこの「戦後」という呼称に関係者たちが何故こだわるのか。三鷹市美術ギャラリーの担当者には確かめていないので判らない。少なくともここで私自身に限って述べれば、人類の災禍である戦争を超えて(生き延びた)ひとびとが共有した時間の中で生まれ、育まれた新しい造形思考によって制作された作品群。それがこの国の「戦後美術」である、と考えている。

この三年近くの間、その「戦後美術」において活躍したアーティストの方々が多数お亡くなりになっている。ある方は天寿を全うされたり、ある方の場合にはこちらが画廊でひょっこりお会いできる気分のままだったりする。けれど、亡くなられたアーティストの方々全てに対して私が今ここで持つ思いは、畏敬とも尊敬ともつかないもので、一番近い表現は感謝、と表現することが妥当だろうか。同じ時代に生き、彼らが制作しなければ見られなかったであろう、すばらしい作品のかずかず。その作品に接する事ができたのは、何よりも彼らのおかげである。

と、こう書いてもなお、「現代美術」はちょっと苦手です... とおっしゃる方々がおられることは想像がつく。だが、美術作品にはアーティストと同じ時間・同じ時代の空気を吸った人間でなければ理解できない部分があるはずあって、そのことについて考えることは「教養」などではない。大袈裟に云ってしまえば、アーティストと同じ時代を生きた人間の義務ではないか。現代の社会とそれに続く未来に対して私達が果たすべき大切な義務として選挙があることと同じである。(wa.)

逝きし芸術家を偲んで / 新収蔵作品展

2004(平成16)年2月7日(土)-29日(日)

10:00-18:00 金曜日は20:00まで

(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金。

逝きし芸術家を偲んで・出品作家

斎藤義重(1904-2001) / 堀内正和(1911-2001) / 川端実(1911-2001) / 小野忠弘(1913-2001) / 北代省三(1921-2001) / 大辻清司(1923-2001) / 山田光(1923-2001) / 鈴木治(1926-2001) / 勅使河原宏(1927-2001) / 今井俊満(1928-2002) / 若林奮(1936-2003)

上から
北代省三 《蝕る日の軌跡》1956-57(88-89再構成)
若林奮 《7.28-8.23 クロバエ上の変更》1969
今井俊満 《La Grotte de la Sirène》1960

ニューコレクション、一挙公開

7階展示室では、昨年度新たにコレクションに加わった作品を紹介する、「新収蔵作品展」を開催します。

平成14年度には、32件の作品を購入、13件の寄贈を受け、計45件の作品が新たに千葉市美術館の所蔵品となったほか、64件の作品のご寄託をいただきました。千葉市の三つの収集方針「1.千葉市を中心とした房総ゆかりの作品」「2.近世・近代の絵画と版画」「3.現代美術」に沿って、コレクションを補完する意味あいの強い、稀少性の高い作品が収集されました。以下簡単にその内容をご紹介します。

房総ゆかりの作品では、先の所蔵作品展「夢二・深水と大正の女たち」において一足先に公開して人気のあった横尾芳月の大正時代の大作《線香花火》や、御寄贈いただいた五十嵐幹《東大寺》にまず目をひかれるでしょう。

近世絵画の新収蔵品は、いずれもごく最近新発見されたものばかりです。西川祐信の《四季風俗図巻》など、色鮮やかで細部までよく描き込まれて見飽きない風俗描写は必見です。また、一昨年「鈴木春信展」に出品された珍しい春信版木の版木もコレクションに加わりました。

近代版画では、棟方志功の原点というべき『星座の花嫁』や畦地梅太郎『満州』など馴染み深い版画家の木版画集、川西英の初期作品《軽業》などが並びます。千葉市美術館のコレクションでは最も充実した分野の一つで、その成果は、来年度開催されるシリーズ展「日本の版画 1931-40」にも生かされます。

現代美術の分野では、同時開催の「逝きし芸術家を偲んで」に出品される山田光の作品や、現在開催中の「ダン・グレームによるダン・グレーム」の出品作《アメリカのための家》も新収蔵作品です。ほかに、フランスを代表するコンセプチュアル・フォートの作家、ジャン・マルク・ピュスタモントの稀少なセット作品などにもご注目下さい。(ma)



西川祐信 《四季風俗図巻》江戸時代中期



川西英 《軽業》1920年代後半



ジャン・マルク・ピュスタモント 《無題 1993》 1993年

第35回記念千葉市民美術展覧会

千葉市の美術振興をはかるため、市民芸術祭の一環として、会員作品及び公募入選作品を一堂に展示します。今年は35回目の記念展です。日本画・洋画・彫刻・工芸・書道・写真・グラフィックデザインの7部門の中で、力作が出品されます。

第35回千葉市民美術展覧会

2004(平成16)年3月6日(土)-2004(平成16)年3月26日(金)
10:00-18:00 金曜日は20:00まで(最終日は午後5時まで)

【休館日】 毎週月曜日

【記念講演会】

3月20日(土) 午後1時30分より

「浮世絵の三形態 - 肉筆画・版画・版木 - 」

千葉市美術館 学芸課長 浅野秀剛

会場:11階講堂

展示室で考える

ギャラリートークの魔力

午後2時頃からのことが多いのですが、来客を展示室入口に集め、学芸員やボランティアなどが1点ずつ作品を解説して歩き、観客はそれについて歩くイベントがあります。ギャラリートークとか、ガイドツアーとかいわれてるイベントです。そもそも作品や展覧会趣旨を説明するにはパネル、配布するパンフレット、ワークシートなど多くの方法がありますが、トークが一般的になったのはそんなに古いことではありません。この10年くらいのことでしょうか。教育普及活動というのが美術館で一人前に取り扱われるようになった時期とほぼ一致します。そのモデルケースが普及部門を独立に持つ欧米の美術館にあることは確実です。

日本で何をもって嚆矢とするか調べたことはありませんが、北九州市立美術館に始まり、その後元ニューヨーク近代美術館(MoMA)のアメリア・アリナスを招聘した川村記念美術館あたりから流行してきたように思われます。更にその後生涯学習と学校教育との連携が公的に推奨されたこともあり、もはや全く開催しない館が珍しい状況です。

もっとも、かつてから列記解説と言われる催し物があり、博物館で、やはり時間になると専門家が展示室にやってきて作品を解説していったものです。ただそのコミュニケーションは一方的で、権威のお話を静かに拝聴する感がありました。トークは、疑問にタイムリーに答えてもらえるインタラクティブな点に意義があります。職員でなく、ボランティアがかかわるのも最近の動向ですが、そこには美術館にとって中間支援層を増加する意味もあります。

上手な人のトークだと、観光地の名物和尚の法話のように、大学の講義などとても適わない面白さです。しかし気をつけなければならないのは、知識を得るためなら、依然として書籍やパンフレットなど、幾度でも反芻できる活字メディアにまさるものはないという点です。肝腎なのは入門書に掲載済の知識ではなく、作品に更なる興味を持つに至るまでのとば口を示すことです。

実は私はこの種のトークに関して意見を求められると大抵否定的な見解を示すことにしています。美による感動とは本来、自分の頭脳に、ある回路を形成することに他ならないと考えているからです。その過程の何らかの部分の他人まかせにするのは、鑑賞行為の成立に関わる問題です。何人といえども作品と鑑賞者の間に立つ権利はないのです。これは理想ですが、また、来館者が話し手の動作や表情を見て面白がっていたとしたら、そのトークは残念ながら失敗です。話を聞きながらも、観客の視線は作品に止まるべきで、これにはかなり困難な技術がともないます。

ギャラリートークの名手として知られた畏友沼辺信一氏が川村記念美術館に勤務していた当時こう言っていたことを忘れられません。「トークとは自転車の補助輪のようなもんだよ。初心者に必要なものでも、(美術鑑賞に関して)一人前になっても頼っているようではダメだね。」

半田滋男(和光大学芸術学助教授、元千葉市美術館学芸員)

「美術館ニュース」編集後記

千葉市美術館は「ダン・グレサムによるダン・グレサム」展で新しい年を迎えました。本号では、意外にご紹介できる機会の少ない展示の様子を中心に編集しました。現場の様子が少しでもお伝えできたら幸いです。ダン・グレサムの作品は、人がその作品にかかわることで一層面白く鑑賞できるものが多いようです。是非展示室での体験をお楽しみください。

新しい年の美術館ニュースC'nがより充実した紙面となるようスタッフ一同頑張っていきたいと思います。

本年もどうぞよろしく申し上げます。

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：<http://www.city.chiba.jp/art>

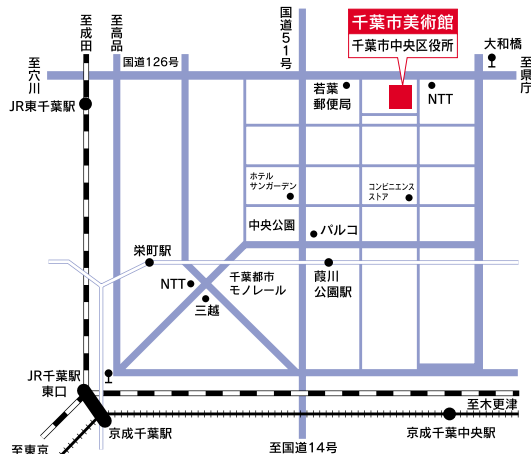
JR千葉駅東口より

徒歩約15分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2004年1月1日

【印刷】 株式会社プリンテックメディア